

能役者は何故神を演じ得るか

——乞食猿樂と隱身信仰——
おんじん

堂 本 正 樹

先日藤沢の教育センターで長期研修員の先生方に六回に渉って世阿弥を講じた。その時の質問に「中世の能役者は賤民でありながら何故〈神〉を演じ得るのか」というのがあり、講師としては当然、民俗学・神話学の常識に従った回答をさせて戴いた。

能役者を含む芸能人が、長く「乞食所業」(後愚昧記)として賤しまれていたのは、世界にまたがる差別の一環で、それ自体には文明史上の課題だが、ここでは文学的に、説話面を一瞥して見たい。

土地に属さず、食料の生産に与らなかつた芸能民が「乞食」とされたのは、文字通り「食」を「乞う」からで、そうした行為は一般人の乞食を「解怠ニシテ空シク一期ヲ送ル故ニ老後ノ今乞丐トナレリ」(『三国伝記』舎

衛城老翁事)といった人生設計の誤り、もしくは個人の怠慢と考えた。やがてそれが仏教の因果の教理により、過去の罪とされる。

だが、乞食は本来釈迦如来自身が行つた行為であつた。しかし釈迦は本来王族であり、乞食はその身分に抵抗する行為だつた。『今昔物語』巻一の「仏・婆羅門の城に入り乞食したまえる語」では、釈迦が乞食することは「人の家ごとに行きて物を乞ひ食ふ事有り。悪く無愛也。(皇族でありながら)そぞろ物に狂ひて山に入りて仏になりたり」と異教徒に云わせた。この釈迦を規範として僧侶が凡俗から受ける権利とされる乞食も、本来の常民の賤視を逃れることは出来ない。

つまり仏徒の乞食は、表面賤しいが本来高貴の行為であつた。となれば乞食行為一般に

も、この理論が援用される。「浅間しい」「物狂ひ」が「清水寺の寶日聖人にていまそかりける」(『撰集抄』寶日上人の事)という、実態と表面の背反だ。

能の『卒都婆小町』では、汚い乞食が小野小町だつた。これは『十訓抄』の三の六や『発心集』の十一にある「晒れ老れた」乞食の尼が、いと美しい筆跡で見事な歌を詠む話などに通じる。さてこそ「十訓抄」のこの部名は「人倫侮ル可ラ不ル事」であつた。

乞食が神であつたのは『三国伝記』の「光明皇后事」にある。「身体膨張爛壞シタル乞ガイ人」が皇后の施行の湯を乞い、直接垢を擦る事を望む。皇后が垢を清めると乞食は自身文殊菩薩であることを明かして虚空に去つた。『元亨釈書』には乞食云々は無く、その

代わり悪瘡の病人の「疥ヲ吸ヒ膿ヲ吐キ頂ヨリ踵に至ル」とある。仏も阿闍伽である（この乞食の膿を吸う行為は『打聞集』などにある「三藏法師が瀕死人の膿を吸うとその人は実は観音菩薩であった」との説話と共通）。

この話は当然聖徳太子の片岡山説話の「飢え死ぬ者実ハ聖者」解釈を想起させる。『日本霊異記』には病み臥す「乞食の人」に太子は衣を給う。後死したこの乞食の墓に死骸は無く、その人は聖人であつた事が分かる。「誠に知る。聖人は聖を知り、凡人は知らず。凡夫の肉眼には賤しき人と見え、聖人の通眼には隠身おんじんと見ゆといふことを」が、霊異記の教訓である。

「乞食」とするのは『霊異記』のみで、『書紀』『七代記』は「飢えたる者」、「万葉集」は「死人」であつた。『三国伝記』の光明皇后説話やこの『霊異記』にある「乞食」との理解は、説話の唱導寄りの解釈であり、仏教徒の「布施」への理解を求めようとする態度が、反映していると思つて良い。

『霊異記』の「隠身」の語は他に中巻の「おのが高き徳を待み、賤しき形の沙弥を刑ちて、現に悪死を得る縁」に「袈裟を着たる類は賤しき形なりといへども、恐らずにある

べからず、隠身の聖人はその中に交はりたまへり」とあり、『日本国語大辞典』や『角川古語辞典』にも無いが、大切な語ではないか。

『今昔物語』の「長屋親王沙弥を罰ちて現報を感じたる語」には、「頭を剃り袈裟を着たらむ僧をば善惡を嫌はず、貴賤を撰ばず恐れ敬ふべきなり。その中に権者身を隠して交り給ると知るべし」とある。元興寺での供養で方式を乱した沙弥を長屋親王が打つた。この結果親王は讒言されて自殺、死骸も凌辱された。この有名な説話には乞食への畏怖を宣伝する意味内容が、いつか加わつたのだ。

『今昔』にはその一つ前の「白髪部猪麿乞食の鉢を打ち破りて現報を感じたる語」では、猪麿なる者が三寶を信ぜず、乞食を罵り鉢を割つた。その報いとしては彼は倉が倒れてその下敷きとなつて死ぬ。

ここでの教訓。

—— されば乞食を見ては、喜びて、多少を嫌はず急ぎ物を施すべし。いかにいとほんや。罵り罰なぐさたむことをば、ゆめゆめ止むべし。乞食といへども三寶の内なり。その中にも、乞食の中にこそ、古も今も、佛菩薩の化身は在すとなむ、語り伝へたとや。

……この「乞食実ハ仏」の思想は、「権者ごんぎ」、

つまり「権現」の発見である。仏が日本の土地に権かりに現れ、信仰を広めるための方便として賤しい者として生まれる。

クリシタンの仮名草子『伊曾保物語』の中の第一「いそは子息に異見の條々」の、「汝乞食非人をいやしむ事なかれ。かへつて慈悲心ををこさば、天帝の助けに預あづかるべし」との教訓は、一見現代的ヒューマニズムの色彩が強いが、本来この「民俗」の線上で理解しなくてはなるまい。

その民俗とは、「賤しい者は高貴なものの借りの姿である」との認識なのだ。クリスト教にもこの逆説は存在し、それが民話や童話の「悪魔の呪いによって醜い姿に替えられた王子」の物語の根源を成している事、広く知られている。

乞食である猿樂が、神を演じる資格は、かくて成立する。